

点歩

2月例会「ドン・ジョヴァンニ」
バリトン鈴木敬治氏より
コメントを頂きました

湘南コンサートの会2月例会に出演致しました、初め騎士長、死んでからは石像役になった鈴木です。「ドン・ジョヴァンニ」は 昨年渋谷で演じたレポレッコ役に続いての騎士長・石像役でしたので、作品への理解がより深まってきた中の稽古場でした。日に日にエキサイティングになって行く稽古場、オペラ制作にかける熱い思いを感じました。

さてこの原稿を書いているまさにその最中に村上春樹の最新作「騎士団長殺し」発売のニュースになぜかドキッとしていたりしています（「騎士団長殺し」というのは小説に登場する絵画の題名なのですが・・・）。会場がフラットなリラホールでの公演ということで若干緊張もしましたが、かえって観客席と舞台の高低差がなく距離感のないことが、舞台と観客席のミュージカルの舞台で感じるような、舞台と観客席の一体感



を生んでいたように思いましたし、なんといってもリラホールの最高級の響きの中で歌えるという事も大きな魅力でした。

この公演で最も印象に残りましたことは、なによりお客様の「暖かさ・温かさ」でした。わたくしの出番の関係上、一幕での騎士長として舞台上での死亡したままの時間、二幕での石像としての舞台上での待ち時間の間、ひしひしと感じました客席からのまなざし、お客様の息遣い、舞台への反応などいままでの公演で経験したことのない非常にやさしい暖

かさ・温かさでした。一幕の舞台上での死体役は寒かったです！（笑い）。湘南にこのような会員制の会が存在すること自体驚きなのに、その上お客様の品格の高さや、音楽への理解度の深さ、そして何より会員制だからこそ得られる会員同志の音楽を通じての交流は、歌手とお客様の一体感へと派生し、これが湘南屈指の高度な公演を支えているのだと感じました。ふと 35 年以上昔バりに在住の折、オペラ座の会員として毎回オペラ座の会場で感じた、会員の間で何世代にもわたって積み重ねられ培われた温かさと同じ感情を思い出しました。

公演後もお客様と親しく懇談させて頂き、早河さんはじめ常連のキャストの方々との会話を横でお聞きしながら、ますますこの感情は私の中で確実なものとなりました。

10 年前にライブチヒ在住の折には、東西ドイツ実現の原動力となったデモ発祥のニコライ教会のバッハ合唱団に所属して、毎週日曜、礼拝やコンサートで宗教曲を歌っていました。当時礼拝に参加された方々や 聴衆の方々と共に感じた一体感とも共通したものが存在するとも感じました。ぜひこの素晴らしい空気が 益々おおきく育まれていかれますように期待しております。またぜひ私もその一端に、いつしか参加させていただければ幸いです。

鈴木敬治（バリトン歌手）

6 月例会出演・水谷川優子さんの思い出

中田 有（湘南エールアンサンブル・チェロ奏者）

水谷川優子さんは桐朋学園高校音楽科の一学年上の先輩で、幼なじみのチェロの先輩を通して親しくなりました。私がまだ上京してすぐで寮生活で寂しくしていた高校生の時に、ステキな洋館のご自宅へご招待いただいた機会があり、友人たちとお茶とお菓子で夢のような時間を過ごしたのを思い出します。大学生に上がってからは、一時期、井上頼豊先生門下から武者修行のために優子さんと同じ松波恵子先生門下になったこともあり、さらに可愛がって頂きました。

オーケストラの授業でチャイコフスキーのピアノコンチェルトを弾いたのですが、2 楽章にチェロソロは1 プルト2 人で弾くように指示があり、隣で一緒に弾く機会がありました。私は脚を引っ張ってばかりでしたが、名前が優子さんと有なので、明るく「私たち、ゆうゆうコンビね」と言っただき、いつも楽しく、緊張している私をうれしくリラックスさせてくださいました。

今回の湘南コンサートの会でのコンサートに向けて、皆様が喜んでいただけることを目指し、温かい心と熱い思いをこめて話す姿に私も心動かされました。また、ご実家の鎌倉とベルリンを何度も往復しながらメールをやりとりしたのですが、「今はイスラエルの死海にいます」、「エジプトにいます」と、彼女は引っ張りだこです。ユーモアの中に優しさとエネルギーがあって、音楽を通してこれからのいろいろな分野に影響させてくれると思います。

優子さんのチェロは、溶け合う色の中に、輪郭を描く音の発音やレガートに、心地よくきれいで、いつも憧れていました。エールアンサンブルとのアンサンブルにどんな薫りと、色になるだろうと今から楽しみで、仕方ありません。



水谷川優子氏

オフィシャルブログ：<http://yukomiyagawa.blog5.fc2.com/>

CADENZA

～チェロの魅力を堪能する6月～

水谷川優子(みやがわゆうこ)の世界

6 月例会では、湘南出身でヨーロッパでも大活躍中のチェリスト、水谷川優子さんをゲストに迎え、無伴奏の曲から技巧的な作品、ピアノ五重奏などの室内楽曲まで、バラエティー豊かなプログラムをお聞き頂きます。水谷川さんのチェロの魅力を存分にお楽しみ下さい。

カタロニア民謡／カザルス：鳥の歌

原曲はパブロ・カザルスの故郷カタロニアのクリスマス・キャロルで、聖誕を鳥が祝っている様子を歌っています。カザルスが「私の生まれ故郷カタロニアの鳥は、ピース、ピース（peace）と鳴くのです」と語り、「鳥の歌」をチェロ演奏したとの伝説的なエピソードがあり、この曲には故郷への思慕と、平和の願いが結びついています。

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調 Op.114「鱒」

シューベルトが若さ溢れる 22 歳の時の作品です。第 4 楽章が歌曲『鱒』の旋律による変奏曲である故、『鱒』という副題が付きましました。水の中に現れては消えるますのモチーフを変奏曲でうまく表しています。通常のピアノ五重奏の編成（ピアノと弦楽四重奏）とは異なり、この作品ではピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロおよびコントラバスという編成

がとられていますが、コントラバスが土台を支える事によりチェロが解放され、メロディや内声部でチェロの魅力が更に引き出されています。この編成は、シューベルトが 1819 年に北オーストリアを旅した際に出会ったチェロ愛好家のパウムガルトナーからの依頼を受けたためと言われています。

第 1 楽章 ソナタ形式で、豊かな旋律に溢れ、軽快なリズムで奏されます。

第 2 楽章 美しく幻想的なメロディです。

第 3 楽章 活気に満ち、ピアノとの対話が面白いです。

第 4 楽章 歌曲「鱒」の旋律による変奏曲。第 5 変奏まであり、それぞれの楽器が主題を奏でます。

第 5 楽章 非常に快活なフィナーレです。



バッハ：無伴奏チェロ組曲 第 1 番ト長調 BWV1007

バッハの無伴奏チェロ組曲は第 6 番までありますが、バッハが 30 代の頃にチェリストとヴィオラ・ダ・ガバンバのために書かれたと言われています。それぞれが前奏曲と舞曲の 6 曲

で構成され、一つの調性で統一されています（第 1 番はト長調）。20 世紀初めにパブロ・カザルスによって再発見され以来、チェリストにとっては「旧約聖書」のような存在となっています。

ポッパー：ハンガリー狂詩曲 Op.68

ポッパーはチェロのサラサーテとも言われていたプラハ出身の超一流のチェリストです。七つのハンガリー民謡を巧みに取り入れているこのハンガリー狂詩曲は、サラサーテの技巧的なヴァイオリン作品チゴイネルワイゼンに並ぶ作品とまで言われている技巧的な作品です。

フォーレ：エレジー Op.24

フォーレが 1880 年に作曲したチェロ独奏と管弦楽のための楽曲ですが、今回はチェロと弦楽合奏で演奏します。元々は、完成されなかったチェロソナタのために緩徐楽章として構想されました。物悲しく厳粛な始まりと、恋の絶望を象徴する濃密で早足の楽節によるクライマックスとが際立っています。

チャイコフスキー：アンダンテ・カンタービレ

「アンダンテ・カンタービレ」とは、チャイコフスキーが作曲した弦楽四重奏曲第 1 番の第 2 楽章に付けられた愛称で、名曲として愛されています。チャイコフスキーがウクライナで聴いた民謡に題材を得たと言われているノスタルジックな美しい旋律と、2 拍子と 3 拍子の間を揺れ動く独特のリズムが相まって、夢想的なイメージを作り出しています。